
ラストダンス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラストダンス

【Nコード】
N9367B

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
別れることになった俺達。最後の思い出にダンスを踊ることにした。ところがそれが思わぬところへと。別れが転じて、そんなお話です。

第一章

ラストダンス

これでお別れだ。そう思った。

俺達は別れることになった。理由は何かお互いよくわからない。気が付いたら言い争いばかりするようになってそれで遂に別れることになった。よくある話なんだろう。

別れるのはダンスの後でとなった。仲間うちでのパーティーの場所、俺達は二人でそこに出席した。

「一緒に行くのもこれで最後ね」

「そうだな」

俺は彼女に応えた。そう思うと寂しいし切ないが今になってはどうこうすることも出来ない状況だった。

だが最後に一緒に踊ることは決めていた。本当に最後だ。俺達はそれまでは一緒にいることにした。

「ねえ」

波がかった赤茶色の髪を後ろで束ね小粋な赤いドレスを着た彼女が俺に声をかけてきた。

「はじめて会った時のこと、覚えてるわよね」

「ああ」

俺はその言葉に答えた。忘れる筈がなかった。

「こうしたパーティーの場所だったよな」

「そうよ」

彼女もそれに応えてくれた。二人で何か無性に懐かしい気持ちになった。

「覚えてくれていたのね」

「忘れるわけないだろ」

俺はこう返した。

「来るつもりはなかったのよ、あの時」

彼女はふと言った。

「気分が乗らなくて」

「そうだったんだ」

「そうよ。それでも出たけれど」

「で、俺と会ったと」

「運命だったんでしょね」

彼女はその時のことを思い出しながら述べた。

「きつと」

「そうだろうな」

俺もそれに応えた。

「だから会って」

「ええ。それで付き合って」

「そうだったよな」

また思い出してきたがそれがやけに悲しい。

「色々あったよな」

「そうよね。本当に色々」

今まであったことが全部思い出される。今思うと一瞬のことだったけれど永遠のことだったようにも思える。それが不思議だったけれど自然に思えた。

「けれどそれも終わりね」

彼女は辛い声で述べてきた。

「今日で。全部」

「ああ」

終わるきっかけは些細な言い争いだった。それが大きくなって遂に別れることになった。馬鹿なのは俺だったのか彼女だったのか。そんなことはもうどうでもよかった。俺達が別れることは事実だったから。それを今思い出しても考えても仕方のないことだったのだ。二人で寂しく、辛い顔をしていると周りの連中が声をかけてきた。皆俺達のことには知りはない。

「よお、もうすぐだぜ」

その中の一人が俺に声をかけてきた。

「ダンスな。準備できてるよな」

「一応な」

俺は答えた。

「できてるぜ」

「そうか。じゃあ今日もノリのいいダンス頼むぜ」

「あんた達二人のダンスが一番いいからね」

「期待してるわ」

皆そう声をかけてくれる。俺達のこととは知らないで。言おうと思
ったがどうしても言えない。それが辛くもあった。

「そろそろか」

「そろそろね」

俺達は顔を見合わせて言葉を交し合った。

「行くのは」

「準備、いいわよね」

彼女はこう声をかけてきた。

「もう」

「ああ、勿論だよ」

俺はそれに言葉を返した。迷いのない言葉で。

「何時でもいいぜ」

「そう、何時でも」

「別れるのはな。もう何時でもな」

言葉を出す度に口の中が苦くなる。喉の奥が痛くなるようだった。
もうすぐ別れの時間がやって来る。俺達の最後の時間が。ダンスで
全てが終わる。それは本当にもうすぐだった。

「よし、じゃあいよいよはじまりだ!」

誰かの声が聞こえてきた。

「踊ろっぜ! いいな!」

「よし!」

「気持ちよくな!」

皆それに応える。応えていないのは俺達だけだった。

「じゃあ行くか」

「わかったわ」

彼女は俺の言葉に短く頷いた。最後の時が遂に来た。彼女の顔は青くなっていた。多分俺の顔もだ。ラストダンスだ、今俺達はそれに向かった。

「御前等も踊るんだよな」

「勿論じゃないか」

俺は友達の一人に笑ってこう返した。

「だからここにいらっしゃる？」

「そつだよな」

「そつだよ」

答えはするがその理由は言わなかった。とても言えなかった。

「だからな」

俺の言葉は少し辛いものが入っていたかも知れない。気付かれたかも知れないと怯えた。

「踊るぜ。気持ちよくな」

「ああ、今日も見せてくれよ」

その友達は俺の言葉に笑顔になってきてまた言ってきた。何も知らなくて本当に楽しそうだった。少なくとも今の俺とは全然違う気持ちなのがわかる。

「頼むぜ」

「わかったよ。じゃあ」

「ええ」

俺が声をかけて彼女がそれに応えた。こうして踊りがはじまった。ごく普通のチークダンスだ。けれどこれは俺達にとっては最後のチークダンスになる。それを噛み締めながら踊りはじめた。

踊りの間俺達はずっとお互いの顔を見ていた。これで最後だ、そのことをくどいまでに噛み締めながら。時間は無限なようであつた。という間のよう。踊っている間にまた今までのことが思い出される。

思い出したくないのに記憶は思い出される。不思議な気持ちがある。けれどそれも終わってしまう。時間は常に動くものだからだ。踊っているうちに遂に時間が終わってしまった。

第二章

終わった、そう思った。これで全部終わりだと。彼女も同じだった。俺達は踊り終えた後お互いの顔を見て寂しく笑い合っていた。けれどその時だった。周りの皆が俺達に声をかけてきた。

「今日もよかったぜ」

「やっぱり流石だよな」

「あ、ああ」

俺も彼女もその声に応えた。何か急に言われた感じだった。

「また見せてくれよな」

「えっ」

この言葉には正直戸惑いを感じた。

「だからだよ。見せてくれよ」

「いいよな」

皆そう俺達に対して言ってきたのだ。

「やっぱり二人のダンスが一番いいから」

「それだけ息が合ってるってことよね」

「息が」

「合ってるのかしら」

俺も彼女もそれを聞いて驚きを隠せなかった。今別れようとしているのに。急に言われた感じであった。けれどそれも当然かも知れなかった。俺達が別れる話は俺達しか知らないからだ。それだと当然だった。

「そつだよ。二人はやっぱり一番合ってるよな」

「ああ」

皆そのうちの一人の言葉に応えていた。何か俺達だけ取り残された感じだった。

「だからな」

「また踊ってくれよ」

そう俺達に声をかける。何か俺達はその言葉に身動きが取れなくなった感じになっていた。

踊り場から離れてまた二人になった。そこで俺は彼女に声をかけた。

「なあ」

「何？」

彼女は俺の言葉に顔を向けてきた。俺は彼女を見ずに正面をぼんやりと眺めながら話をした。

「俺達つてさ、やっぱり合ってるのかな」

「そうみたいね」

俺の言葉に伝えて言ってきた。言葉が耳に入る。

「皆の言葉だと」

「そうだよな。俺達のダンスが最高か」

「そう言ってくれたよね」

「そうか」

「ええ」

彼女の顔も正面になった。少し俯いていた。俺はそれとは正反対に上を見上げていた。そのまままた言葉を選びながら口に出す。

「あのさ」

「うん」

「また、一緒に踊らないか？」

俺はこう提案してみた。

「また？」

「ああ。皆が言ったからじゃないぜ」

一応はそう断った。けれど心に響いたのは事実だ。

「またさ。最高だっというんなら」

「そうね」

彼女もそれに頷いてきた。どうやら同じことを考えていたらしい。

「一緒にね」

「またな。だから」

俺はさらに言った。言葉が今度は自然に出て来た。

「こんなこと俺が言うのも何だけどさ」

だが俺は切り出した。

「あれだよ、その」

「いいわよ、言っても」

彼女も言ってきた。穏やかな様子で。

「ていうか言って。次の言葉」

「ああ。それでな」

「ええ」

彼女は俺の言葉を待つ。俺も言うことにした。

「また。一緒に踊らないか」

言葉にして出してみた。後は彼女がどう答えるかだ。

「どうだい？」

「そうね」

彼女はまずこう言ってきた。それから俺に顔を向けてきた。

「それじゃあまた」

「踊るのか？」

「踊りましよう」

今度ははつきりと言ってきた。

「一緒にな」

「そうだよな。これでラストダンスのつもりだったけれど」

どうやらそうはならないらしい。俺達は話をしながらそれ思った。

「またな」

「そうね」

彼女はまた応える。

「一緒にね」

「ああ、一緒にな」

「不思議よね」

彼女は苦笑いを浮かべてきた。

「別れるって決めたのに」

「そうだよな、今さっきまでそのつもりだったのに」

俺も苦笑いになった。苦笑いのまま話を続ける。

「それがな」

「これからまた何があるかわからないけれど」

「けれどまた一緒に」

「踊りましょう」

俺達は頷き合った。そのままパーティーを楽しむ。

ラストダンスはラストダンスにならなかった。そのまま楽しいダンスになる。俺達は別れることなくこれからも一緒にダンスを踊ることにした。

ラストダンス 完

2007・1・7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9367b/>

ラストダンス

2010年10月8日10時57分発行